

未来を拓く

東京都立大学ゆかりの
女性研究者たち
vol.2

ロールモデル集
東京都立大学ダイバーシティ推進室



日本における女性研究者の割合は、2020年度末で17.5%となっています。OECDに加盟している国の多くで、女性研究者の割合が25%~35%前後であるのと比べると、非常に低い数字と言えるでしょう(男女共同参画白書 令和4年版)。女性研究者が少ない現状を改善し、理系・文系等の分野を問わず、研究職を目指す女性を増やすことは、国際的な競争力の向上や学問研究の発展、企業活動のさらなる活発化、イノベーションの促進など、多方面から必要とされています。

本ロールモデル集は、研究者や専門職として活動する本学の修了生にご協力いただき、仕事の魅力や実際のキャリアパスなどを提示することで、研究者を志す女性の一助になればとの思いで作成しました。ロールモデルとしてご登場いただいたみなさまは、本学での学びをそれぞれの形で活かしてキャリアを歩んでいます。多様なキャリアのロールモデルとして、参考にいただければ幸いです。

※ 本学は、2020年4月に大学名称を首都大学東京から東京都立大学に変更しました。
※ 本文中において「首都大学東京」を「首都大」、「東京都立大学」を「都立大」と略して記載しています。



01

人文科学研究科
GRIB Dina

名古屋大学大学院
工学研究科
国際交流室講師



02

理工学研究科
河野 直子



AFRY社(スウェーデン)
Software and Optics

03

理工学研究科
斉藤 早紀



味の素株式会社食品研究所
健康価値開発センター
加工食品開発グループ

04

都市環境科学研究科
森田 菜月



富士通株式会社研究本部
人工知能研究所

05

システムデザイン研究科
山本 さき



Ridgelinez株式会社
コンサルタント

06

人間健康科学研究科
岩瀬 和恵



川崎市立看護大学
看護学部講師

07

人間健康科学研究科
助川 文子



県立広島大学
保健福祉学部講師

01

首都大学東京大学院人文科学研究科
博士後期課程修了

日本語教育における 文化理解の重要性を伝えたい

キャリア／今の研究

私は現在、名古屋大学で留学生を対象にした教育と、短期留学プログラムの運営や協定校との連絡・調整など、国際化推進に関わる取組に携わっています。もともとは、ロシアの極東大学で日本語と日本文化を学び、ウラジオストクの日本総領事館に勤めていました。とても働き甲斐のある職場でしたが、次第にもう少し日本のことを勉強したいと考えるようになり、日本のことは日本で学ぶのが一番と考え、中世史を学ぶために明治大学の大学院に進みました。その際、歴史を学ぶツールとして、漢文を読むことが必要になったのですが、これが私にとってはとても難しいことでした。その結果、前期課程は漢文を学ぶことで手いっぱい、十分に歴史の研究ができませんでした。そのことに悔しさやもったいなさを感じ、それまで日本語教育の中ではあまり重視されていなかった漢文教育をテーマに、後期課程へ進学することを決意しました。留学生への漢文教育の研究を指導していただける先生を探していたところ、浅川哲也先生の研究に出会い、首都大の大学院に進むことになりました。首都大では、留学生への漢文教育の方法や、留学生の漢文学習への意識についての研究を行いました。

現在は、例えば留学生向けの教科書のなかで、日本の都市がどのようなイメージと結びつけられて表現されているかなど、日本語教育における文化表象と異文化理解についての研究を進めています。

学生時代

学生時代を過ごした大学・大学院はどれも楽しかったですが、人間関係の良さやゼミの充実度という点で、首都大はとりわけ楽しかったです。広く深い知識を持つ浅川先生のもとに、多種多様な関心を持つゼミ生が集まるので、毎週のゼミ発表がとても大きな刺激になりました。ただ、首都大では研究に集中したため、学内のイベントや学外でのボランティアなどの活動にあまり参加できなかったのは、少し心残りです。

仕事のやりがい

学生と直接触れ合うことができるのがこの仕事の楽しさだと思います。講義とは異なる距離感で毎日のように会い、話すことができ、時には相談に乗ることもあります。問題のすべてを解決できるわけではないですが、少しでも学生の役に立ったことを実感できた時はとてもうれしいですね。また、留学生対象の就活セミナーや工学部の英語スピーチコンテストなど、楽しいと思える企画を実施することができる環境にあることも幸せに思います。



今後の展望

これからも、異文化理解と文化表象の分野で、日本についての研究を続けたいと思います。日本語教育の中では文法や読み書き、スピーチなどに焦点があてられる傾向にあり、文化は周縁的に扱われる傾向にあります。しかし、日本語を使えるようになって、しっかりと日本の文化を理解していなければ、お互いのコミュニケーションが表面的なものにとどまってしまうかねません。そうした意味で、文化の重要性を学術的にもっとアピールできたらと思います。



研究者を志す学生への メッセージ

研究者を目指すには、好奇心を持つことが大事です。研究は個人的な気づきからスタートするものです。私の研究も、自分がわからなかった点、つまづいたところからスタートしています。あとは、その好奇心を論文などの研究成果に持っていける、集中力を持つことです。また、研究に取り組みながらも、自分の生活も大事にしてほしいと思います。タイムマネジメントを意識して時間を作り、研究とは別の趣味を持つなどして心身の健康を保つことは、結果として研究の効率を上げることに役立つと感じています。

02

「0を1にしていく」 過程にワクワク



首都大学東京大学院理工学研究所
物理学専攻博士後期課程修了

キャリア／今の研究

実は、私は現在、研究者としてではなく、コンサルティング会社のAFRYに籍を置き、通信機器メーカーであるEricssonのソフトウェア無線の開発やメンテナンス、トラブルシューティングを行うソフトウェア開発者として働いています。

小さいころから物の成り立ちや仕組みに興味がありました。特に宇宙を想像するのが好きで、宇宙物理学関連の研究をしたいと考えて首都大に進学しました。田沼肇先生の原子物理実験研究室に所属し、さまざまなイオンビームを用いた衝突実験を行い、宇宙にある原子・分子がどのような過程で生まれ、どのように宇宙に存在し続けるのか、もしくは長く存在出来ないのか、などを調べる研究を行っていました。大学院時代には、国際課の派遣留学制度に応募し、前期課程でフランスに、後期課程でスウェーデンに、それぞれ3か月間留学しました。その時の縁もあり、後期課程を修了後はストックホルム大学の研究員として研究を続けることになりました。しかし、手に届かない、見えないものを研究することから、徐々に身近なもの、生活に関連するものに携わりたいと希望が変わってきました。6年以上同じ分野で研究してきた、自分なりにやり切ったという思いもあったのかもしれません。そこに「民間で働いてみたい」という思いが重なり、現在の職場に転職しました。宇宙物理学とは全く異なった仕事ですが、研究をするうえで身につけたプログラミングのスキルが、いまは大いに役立っています。

学生時代

田沼先生の研究室は、とても居心地がよかったですと感じています。先生が学生を積極的に学会に連れて行くなど、学生が経験を積み、発表スキルを高めることができる環境がありました。また、私は英語が苦手で、学部時代の授業ではCクラスだったのですが、前期過程でのフランス留学の際に、語学の苦手意識を克服することができたのが大きな転機になりました。首都大には様々な学部があり、勉強会や交流会などもあって違う研究室や学部の学生と仲良くなれたことも、プラスに作用したのかなと思っています。



仕事のやりがい

今の仕事は実生活につながる実感ができます。「通信機器という自分自身も毎日使っているものの開発に携わる」ということは、大きなやりがいだと思います。また、大きい会社なので、さまざまな経験を持つ人とかかわることができ、それによって自身が成長したり認識が改まったりといった面白さもあります。何しろ全く異なる分野の仕事に就いたので、知らないことだらけで大変ではあるのですが、私は「0を1にしていく」フェーズが一番ワクワクするので、今はとても楽しいです。



今後の展望

これまでを振り返ってみると、その都度迷いながらやってきたと思います。それでも、その時々で関心のあること、好きなことに全力で取り組んできました。これからも、その時に関心のあることに全力で取り組んでいきたいですね。

それから、日本社会に対しては、企業がもっと積極的に博士を採用してほしいと願います。今は働く先が少ないので博士課程への進学を躊躇している人も少なくないのではないのでしょうか。

研究者を志す学生へのメッセージ

好きなことに一生懸命になることとともに、「1回始めたんだからどうしても続けなくては」という思いを捨てることも大事だと考えます。興味があるときにしっかり向き合って、全力で取り組めば、1回離れたとしてもそれまでの蓄積はなくなるわけではありません。

また、大学院進学にあたっては、事前の研究室訪問が大事です。研究分野だけでなく、研究室の雰囲気や先生のスタイルが合うかどうかを確かめることは必要でしょう。学生に質問されていやがる先生はいないので、ぜひ積極的にアクションしてほしいですね。

03

アイデアを具体的な形にする

首都大学東京大学院理工学研究科
生命科学専攻博士前期課程修了

キャリア／今の研究

私の専門は発生生物学という分野で、大学院ではニワトリの胚を用いて、細胞がどのようなメカニズムで分裂と移動を行い、器官ができていくのかといった、卵からヒヨコになる過程を研究しました。幼い頃から教師になることが夢でしたが、高校の生物の先生が印象的だったこともあり、専門的に学びたいと思い理学部へ進学し、更に研究を続けるために大学院へ進みました。ただ、私は研究者というよりも開発者としてのマインドの方を強く持っているようで、そのころから、アイデアを具体的な形にすることを突き詰めたと考えていました。

大学院修了後、日本食研HDに入社し、業務用調味料の開発業務に従事しました。得意先の要望を形にする仕事でやりがいもあったのですが、もう少し広い視野で、多くの人に商品を届けるところで力を試したいと考え、味の素に転職しました。現在は、主にスープの開発に従事しています。きっとみなさんもスーパーやコンビニなどで手に取ったことがある商品だと思います。私のやっていることは、マーケッターが立案したコンセプトから味覚品質（おいしさ）をイメージして試作品を作り上げ、製造プロセスに落とし込んで商品という形にする仕事、言うなれば、アイデアを食品という形にする仕事です。食は誰にとっても身近なもので、この仕事は私たちの生活につながっているという実感があります。



学生時代

企業の研究者として働いている今、経営学やマーケティングの知識の必要性を強く感じています。ですので、学部時代に教養科目で他学部の科目を履修できたことは、視野を広げることができてよかったと感じています。また、桜都寮という学生寮の運営に携わり、同年代の学生が集ってスピーチコンテストを行ったり、寮生が参加するセミナーでファシリテーションを学んだりディスカッションを行ったりするなど、学びの場を自ら作っていたことも、今にして思えばよい経験だったと思います。

仕事のやりがい

担当した商品が世の中に出て、お客様から反応をいただくことがやりがいになっています。商品が棚に並び、お客様に手に取ってもらい、そしておいしいという声を聞くとうれいなんですし、この仕事をやってきてよかったと思います。また、会社全体として基礎研究の積み重ねがあるため、新しいものを開発するにあたって、みんなの力を合わせることでシナジー効果が生まれる環境にあることも、やりがいを感じる大きな要因ですね。

今後の展望

私たちの使命は人々においしいという喜びを届けるだけでなく、食を通じて心と体の健康づくりに貢献することです。昨今の急激な社会変化の中で、心の健康を保つことは簡単ではないと感じています。私は食を通じて、人々がいつまでも自分らしく健やかに生きていくための手助けをしたいと考えています。そのためにも、「おいしさ設計技術」にこだわりつつ、人々が何を求めているか、私たちは何ができるのかを考え抜いてアイデアをブラッシュアップし、具体的な形にしていきたいです。いつか私の仕事は人々を幸せにする仕事だと胸を張って言えたらいいなと思います。



研究者を志す学生へのメッセージ

一つに熱中するのも良いですが、視野や興味を広く持ってほしいと思います。物事に興味を持たないと、相手に伝わるように話すことはできません。それに、引き出しを増やせば、それだけ選択肢も広がります。いろいろやってみたら、どの道に進むかを決めると良いと思います。また、考えることをやめないこと、考えを言語化することも大事です。言語化することは、思考をまとめて伝えることにほかならず、研究者にとっても社会人にとっても、必須のスキルと言えるでしょう。

04

仕事のあり方を変える手法を開発する

首都大学東京大学院都市環境科学研究科
分子応用化学域博士前期課程修了

キャリア／今の研究

私はもともと、コツコツ何かを積み重ねることが好きでした。そういう意味で、勉強も好きでしたから、大学に入った時からぼんやりと研究者になりたいと考えていました。大学では人工光合成の研究室に所属して、実験とモデリングの両面から研究に取り組みました。前期課程を修了後、これまで学んできた化学の基礎研究を通じて社会に貢献できると考えて、豊田中央研究所に就職しました。

ところが、配属されたのは、シミュレーションを用いて車両の設計手法の開発を行う部署でした。機械系で、大学時代とまったく異なる分野でしたので、驚きも戸惑いもありましたが、やるしかないと思い勉強しました。会社にもセミナーへの参加機会を提供してもらうなど、周囲のサポートもあり、その都度勉強して、順を追ってやっていけばできるようになることを実感しました。

その後、結婚を機に拠点を換えようと考え、富士通研究所に転職しました。大学院修了時とは異なり、機械分野での経験も積んだことで、転職の間口が広がったと感じています。現在は、持続可能な社会の実現に向けた個々の課題に対して、シミュレーションを使った手法開発に取り組んでいます。対象とする現象は様々ですが、現象のモデリングやシミュレーション、設計の最適化への取組は、私のこれまでのキャリアで一貫している点だと思っています。

学生時代

大学院にいた頃は、好奇心に任せて自由にやりたい実験や研究ができる環境にあって、ものすごく充実していました。納期もノルマもなく、研究の楽しいところを楽しんだと思います。その中で、仮説を立てて検証する、前提が間違っていないか確認する、適切な比較対象を用意するといった研究の基本を身に付けたことは今に役立っていると思います。ただ、試行錯誤が楽しく実験ばかりに取り組んでいたのも、もっとその成果を論文にまとめるということにも力を注いでいればよかったとも考えています。



仕事のやりがい

手法開発は、社会に役立っていると実感できることがやりがいです。開発した手法を現場で受け入れてもらうためには、単に新しい方法を開発したり自動化したりすればよいわけではなく、その手法を用いることでより良い仕事の成果が生まれるなどの付加価値が必要な場合があります。そのため、どのような課題があり、また将来どのような課題が生じるのか、研究を始める前に様々な角度からしっかり調べることが大切です。そうした見通しが現場の人に受け入れられた時は、特に嬉しいですね。



今後の展望

学生の時とは異なった分野で研究を行っているので、現在の仕事に必要なシステム工学やコンピュータサイエンスといった分野を体系的に学ばなければならないと感じています。私自身、就職してからでも勉強し続けていますが、それは特別なことではなく、まわりを見ても同じです。そうやって学び続けて引き出しを増やし、スピーディに研究開発を行って、自分の開発した手法でお客様の仕事のあり方を良い方向に変えて行けると嬉しいです。

研究者を志す学生へのメッセージ

ひとくちに「研究職」と言っても、企業によってその働き方や役割は異なるので、職種の名前で判断するのではなく、具体的に何ができるのか、中身を確認するようにしてください。研究者は裁量が大きく、自律的な働き方が求められる世界ですので、その分、締切や目標を守ることが大切になります。また、私自身がそうであったように、5年10年後にどうなるかはわかりません。なんでも機会があれば学んでおいて損はないと思います。

05

デザイン思考を ビジネスに活かす

首都大学東京大学院
システムデザイン研究科
インダストリアルアート学域
博士前期課程修了



キャリア／今の研究

私は大学時代から、デザインを学んできました。素材の魅力を活かした機能の創出や表現、デザイン
の概念や手法に興味があり、学部の時には感性を磨くためにイギリス留学も経験しました。大学を卒
業してそのまま働くのではなく、もっと学術の領域で試行実験をしながら表現について学びたいと考
えていたところ、建築家でもあるヴァール・アダムス先生に出会い、首都大の大学院に進みました。

大学院修了後は、何か一つの領域に特化するよりも、社会に出て企業が抱える課題を解決したいとい
う思いが強く、就職を選びました。当初は、従来の技術に新しい要素を加えて新たな商品価値を創造し、
日本企業の持つ技術や想いを国内外に発信したいと考え、広告代理店を志望していました。しかし、そ
の希望を聞いた先生から、コンサルタントの方がふさわしいのではないかとアドバイスを受け、そこか
ら方向を転換し、富士通総研に入社しました。2020年に現在の会社に出向し、その後、転籍しています。

現在は、製造業の企業に対してコンサルティングを行っています。企業の売上拡大に向けて、継続
利用いただくためのサポートサービスの構想企画や顧客との接点強化のご提案、新たなサービス事
業・サービス企画支援などを実施しています。クライアントのニーズを探り、解決すべき課題を定義
し、最適解を探すデザイン思考をビジネスに活かすことができる、やりがいのある仕事です。

学生時代

大学院在籍中に、“未来KADEN Project”とい
う、動物園から学びを伝える新しい体験ツール
を発想するプロジェクトに参加したことが印
象に残っています。フィールドワークやリ
サーチを行って顧客のニーズを定義し、その
ニーズを満たすために必要な事柄は何かとい
うことや、さらに何か新しい体験を提供できな
いかを考え、それを工学系学域のもつ技術を活
用して実現させるというプロセスを体験する
ことができました。このプロジェクトを通じ
て、生活者目線や利用者目線を自然と意識する
ようなデザインの考え方を学ぶとともに、アイ
デアを技術で実現し、社会に実装できることの
魅力を強く感じるようになりました。



仕事のやりがい

コンサルタントは、企業が抱える課題の解決
に直接的に取り組むことができるところが魅
力です。私は考えを巡らせることや、アイデア
を出すのが好きなので、自分が構想策定に関
わったものが現実となり、世の中に出ていくと
ころに大きなやりがいを感じています。その
サービスで成果が出て、クライアントから感謝
されると、さらにうれしいですね。そこに至る
までは大変であっても、次も頑張ろうという励
みになります。

今後の展望

今後は、諸外国に押され気味になっている製
造業の強さを取り戻したいと考えています。
製品を利用するお客様の価値観やニーズの変
化を捉えた上で、従来のモノづくりに限らない
サービス化による付加価値創出と新たなビジ
ネスモデルによる事業拡大をご提案できるよ
うになりたいです。また、自身の働き方に関し
て言えば、女性コンサルタントとしてのキャリ
ア形成という点にも関心があります。自分自
身がロールモデルになるつもりで、仕事だけ
でなく、プライベートと両立できるような働き方
をしたいと考えています。

研究者を志す学生への メッセージ

学生の時期は、自由に何でもできる期間だ
と思います。ですから、将来のことが不安でも、
今好きなこと、やりたいことに精いっぱい取り
組んでほしいです。また、ネットで何でも見ら
れる時代ですが、だからこそ本物に触れること
も大事です。例えば絵画を見に行くことで、そ
れまでの道のりから国の文化に触れ、展示され
ている美術館や空間からより深い考察ができ、
得られるものは大きいと感じています。



06 穏やかな高齢者の看取りを実現するために

首都大学東京大学院人間健康科学研究科
看護科学域博士後期課程修了

キャリア／今の研究

私の専門は老年看護学という分野で、特別養護老人ホームでの看取りを主なテーマとして研究しています。都立病院の救急救命病棟で看護師として勤務していた頃、介護施設から心肺停止の状態に搬送されてきた方に心臓マッサージなどの処置をすることに違和感を持ち、次第に施設でどうかならないのか、施設で働く看護師はどう感じているのか、疑問を抱くようになりました。主任試験に合格し、キャリアアップを目指す道もありましたが、施設での高齢者の看取りをよくしたいという思いが強く、大学院へ進む道を選びました。

前期課程では、特別養護老人ホームで働く看護師にインタビューを行いました。前期課程修了後、現職に就いたのですが、研究をしっかりと極めたいと考え、後期課程に進学しました。後期課程ではインタビューに加え、複数の施設で参与観察を行いました。その際、ベテランの看護師から「入居者が亡くなる1か月くらい前から、何となくの兆候が表れる」という話を聞いたことから、看護師が経験上、肌感覚で理解していることを言語化し、尺度化することに取り組みはじめました。私の研究の根底には、施設での高齢者の看取りをよくしたいという思いがあります。穏やかな看取りを実現するために、看護師が家族と本人の意思の調整役を担えるように役立つ研究成果を出したいと考えています。

学生時代

大学院で学んでいるときに、町全体で若年認知症の受け入れを推進している北海道の北竜町に行き、ゼミの活動として取組を学び、当事者とレクリエーション活動を行ったりしたことは、地域に貢献することの大切さを学ぶ良い経験になりました。また、前期課程の時に、香港大学との交流会があり、私たち院生が企画を立て、浴衣を着て盆踊りをするなどのおもてなしをしたことも、楽しい思い出です。それから、かつての同僚の放射線技師と同じ院生として学内で再会したこともあり、この時はあまりの偶然にびっくりしました。



仕事のやりがい

大学の教員として教育活動に取り組む中で、学生の反応が勉強になる毎日です。一見、反応が薄いようでも、一人ひとりに話を聞いていけば、しっかりした考えを持っていることがわかります。それだけに、授業がオンラインだけになってしまった時は、学生の反応が見えづらく困りました。また、看護師は対面の仕事であり、相手に対して興味を持つことでお互いの信頼関係が醸成される面があるので、学生には人に興味を持つことの大切さを伝えるように心がけています。



今後の展望

後期課程で行ってきた、特別養護老人ホームで働く20人の看護師へのインタビューと参与観察は、その結果をまとめて論文にしました。その延長で、今は看取り期の高齢者の尺度を開発しようとしています。これができたら、経験の浅い看護師でも対応が可能になったり、本人や家族の気持ちやさまざまな準備に役立つのではないかと考えています。研究者として開発した尺度を、論文などの形にして世に出すことで知ってもらい、実際に使ってもらうことで社会に還元できるようにしたいですね。

研究者を志す学生へのメッセージ

私自身のことを振り返ってみると、学生の頃はまじめと言えるような学生ではありませんでした。しかし、働く中で、ライフワークにできる研究疑問（Research Question）と出会い、研究者として活動しています。自分には能力がないとか苦手だとか思い込まずに、自分の考えを大切に頑張りたいと思います。また、私の大学院の同期は様々な領域で働いていますが、今でも連絡を取り合っています。そうした人とのネットワークがあることは、研究活動を進めるうえでも役に立ちます。人との縁も、どうか大切にしたいと思います。

07 研究を通じて社会に働きかけたい



東京都立大学大学院 人間健康科学研究科
作業療法学域博士後期課程修了

キャリア／今の研究

私の研究分野は作業療法学になりますが、その中でも、発達障がいのある子どもと家族の活動・参加を支援する、作業療法プログラムの開発を中心とした研究を行っています。障がいを持つ子どもの意思をどのようにサポートに反映することができるかという観点から、特に軽度知的障がいを持つ子どもの意思決定をサポートできるような仕組みづくりを研究しています。

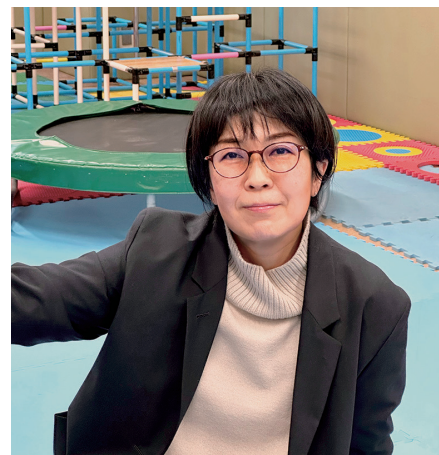
大学卒業後、美術の教員として最初に着任した学校が、たまたま重度の障がいを持つ子どもたちも通う特別支援学校で、そこで作業療法と出会いました。子どもたちと向き合う中で、作業療法に関する専門的な知識がないと何もできないことを実感し、仕事と並行して夜間の専門学校へ通い、作業療法士の資格を取得しました。その後、自治体の発達障がい相談・療育センターなどで作業療法士として勤務し、自閉症や発達障がい児の支援に携わるようになりました。その経験から、今度は発達障がいについて体系的に学び、作業療法士としての専門性を高めたいと考えるようになり、都立大の大学院で発達障がいの作業療法の分野で活躍されている伊藤祐子先生のもとで学びました。大学院で学びながら、さまざまな学校での特別支援教育外部専門家や専門学校等の講師を兼任し、2021年度から県立広島大学の講師として研究・教育活動を行っています。

学生時代

作業療法士の資格取得を目指して専門学校に通っていた時は、勤務先の学校や保護者からの応援もあってプレッシャーになった半面、大いに励みにもなりました。大学院に入った際には、多様な年齢の人が同じ研究室に所属し、とても和気あいあいとして学びやすい雰囲気でした。後期課程に進学すると、研究室に海外からの留学生が増え、ディスカッションが活発になったことで、積極的に発言する姿勢が身についたと感じています。後期課程へは研究職を目指して進学したので、ある意味「腹を決めた」という感じはありました。

仕事のやりがい

発達障がいのある子どもの課題は、本人、家族、学校や地域の関わる施設が連携して検討することが大切です。そのため、若い作業療法士は作業療法の専門性とともに、多様な人とのコミュニケーションを学び、チームの連携を促進する役割があります。意欲ある学生と、こうした新しい作業療法士のあり方を模索し、現実化していくことは、とても手ごたえのある仕事だと感じています。



今後の展望

研究者はただ研究をすればよいというものではなく、自身の研究成果を通じて国や政策に訴える役割があると考えています。そのためには、今起きている問題に対処できる研究を行うことが大切で、現状を理解して、システムに働きかける研究成果を出し、発達障がいに関わる政策に働きかけることができるようにしていきたいと考えています。また、自分で考えることの楽しさを伝えることで、現場でフレキシブルに対応できる学生を育てることも続けていきたいと考えています。



研究者を志す学生へのメッセージ

作業療法士の女性は多いですが、研究の場面にはまだ女性は少ない状態です。もちろん現場は大切ですが、研究を通じた社会構造への働き掛けも同じくらい重要です。そこには多様な視点が必要なので、女性の研究者も増えてほしいと願っています。また、私のように現場を体験してから大学院に進学するというキャリアパスは、一見遠回りのようにも見えますが、自身の体験を踏まえたうえで体系的に学ぶことができるので、大きなメリットがあると思います。自分の頭で考えて、自分の思った道を歩んでほしいと願います。

東京都立大学 ダイバーシティ推進室の事業内容

東京都立大学ダイバーシティ推進基本方針に基づき、男女共同参画の推進、多様性を踏まえた構成員支援、障がいのある構成員支援に関する取組を行っています。

男女共同参画推進

出産・育児・介護などのために研究時間を確保することが難しい研究者のための「ライフ・ワーク・バランス実現のための研究支援制度」の実施や、一時保育施設の運営、ライフイベント支援に関するニーズ調査などを実施しています。

多様性を踏まえた構成員支援

セクシュアル・マイノリティをテーマにした講演会や教職員研修、日本文化を体験しながらさまざまな国籍の教員や学生が触れ合う交流会などを開催しています。また、セクシュアル・マイノリティに関するガイドラインを作成するなど、多様な背景を持つ構成員に対応した環境整備にも取り組んでいます。

障がいのある構成員支援

「障がいを理由とする差別の解消の推進に関する教職員対応要領」（2016年3月制定）に基づき、障がいのある学生への支援や、障がいに関する情報の提供、意識啓発に関わる取組を行っています。障がい学生の支援にあたっては、学生支援スタッフ（有償ボランティア）が中心となって活動しています。

相談窓口の設置

東京都立大学で学び、働き、研究する構成員が、多様な生き方を追求できるように、キャリア・コンサルタントによるライフ・ワーク・バランス相談や、障がいのある構成員支援担当による専門相談、セクシュアル・マイノリティに関する相談などを行っています。

講演会等の開催

男女共同参画、障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティなどのテーマに基づき、意識啓発や環境改善などを目的として、さまざまな講演会や勉強会を企画・実施しています。参加者とともにダイバーシティについて学びあうミニレクチャー「よるダイバー」も好評です。



ロールモデル集
未来を拓く～東京都立大学ゆかりの女性研究者たち～ vol.2

編集／東京都立大学 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 図書館本館 1階
TEL：042-677-1111（内線 2571） 直通：042-677-1337
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行／2023年3月